【論　文】
UDC：72.032.2

日本建築学会計画系論文報告集 第416号・1990年10月
Journal of Archit. Plann. Environ. Engng, AIJ, No. 416, Oct., 1990

マルカタ王宮「列柱大ホール」天井画における ネクベト画像の複原研究

マルカタ王宮に関する研究 I

RECONSTRUCTION OF THE FIGURE NEKHBET ON THE CEILING OF THE GREAT COLUMNED HALL AT THE MALKATA PALACE

Studies on the Malkata Palace I

西本真一*
Shin-ichi NISHIMOTO

The palace-city of Malkata was built by Amenhotep Ⅲ on the west bank opposite the ancient southern capital of Thebes. It was excavated and surveyed by the several investigators from 1888 onward, but the Egypt Architectural Mission of Waseda University resumed explorations there from 1985 to 1988 in order to study on the wide variety of decorative motifs.

From "the Great Columned Hall" located in the center of the Palace of the King, a large number of painted mud fragments were recovered. Some of them bear the parts of succession of great Nekhbet vultures outspreading their wings. The cartouches in pieces of nomen and prenomen which are under the wings of each vultures were also found from the same hall.

In the following discussion the ceiling of the nave in "the Great Columned Hall" is reconstructed by using the actual painted fragments, and the preliminary report written by Tytus is examined including his description on the size of these vultures.

Keywords : *Malkata Palace, Ancient Egypt, Amenhotep Ⅲ, Decorative Paintings, Goddess Nekhbet, Inscriptions*

まえがき

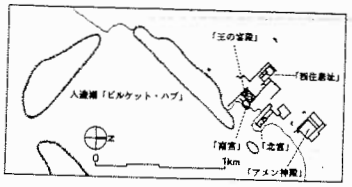
古代エジプト新王国時代において最も権勢を誇った王はアメンヘテプⅢ世（1417～1379 B.C.[1]）であり，この王によって建立された日乾煉瓦造の王宮址が現在でもルクソール（古代名「テーベ」）西岸の，マルカタと呼ばれる地域に残存している。およそ3 km四方にわたる礫砂漠には王の宮殿をはじめとして，アメン神に捧げられた神殿や王族たちの住宅址，職人たちの集合住居遺跡などさまざまな施設が点在する他，港湾施設あるいは祭祀施設として用いられた巨大な人造湖（「ビルケット・ハブ」と呼ばれる）の跡も王宮に隣接して見られ，古代エジプトにおいてこのように王宮都市と呼びうるまでに大規模で，しかも短い期間の間にほとんど全ての建築施設が建造された王宮の遺構としては，次代の王アケナテンの建立によるアマルナ王宮を除くと類例を見ることはできない。

マルカタ王宮に関しては前世紀の末から数度の発掘調査が行われてきており，刊行された正式な報告書の数は限られている[2]ものの，当王宮から出土した土器片に基づく研究などについては欧米の研究者たちによって考察が重ねられていることが知られている[3]。特に，出土遺物に記された文字と敷地におけるそれらの分布状態から王宮各施設の用途と建立年代を探ろうとしたヘイスの論考[4]によって，少なくとも建築施設ごとのおおまかな性格や王宮の建立された時期などの基本的な問題に関してはすでに明らかにされていると考えてよい。

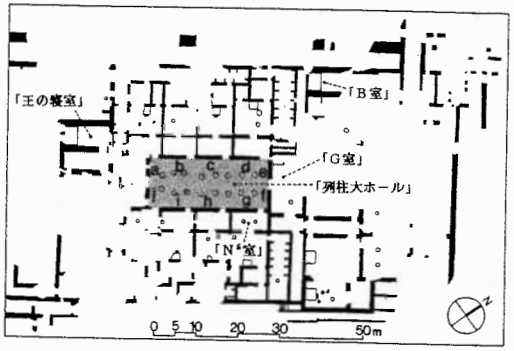
しかしながら当王宮の建築学的側面からの詳しい考察については今日なお多くが未着手のまま残されているといっても過言ではなく，アマルナ王宮とほぼ同時に発見された経緯を有しながらも，マルカタ王宮に関しては建築遺構についての第一次資料そのものが乏しいため，なされて然るべきこのふたつの王宮建築の比較研究を行う

本稿は注6）の発表をまとめ，新たな知見を加えて書き改めたものである。

* 早稲田大学理工学研究所　特別研究員　Research Fellow of the Laboratory of Science and Engineering, Waseda University



図—1　マルカタ王宮址主要敷地図



図—2　マルカタ王宮，「王の宮殿」平面図
(a～jは遺物の出土場所を示す。a＝S(W), b＝W(S), c＝W(M), d＝W(N), e＝N(W), f＝N(E), g＝E(N), h＝E(M), i＝E(S), j＝S(E))

にも非常な困難が伴っているのが現状である。これは古代エジプト石造建築の研究に比べ，日乾煉瓦造建築についての研究が著しく立ち遅れていたことにも起因しており，むしろ当時においては圧倒的多数を占めていたはずの古代エジプトの日乾煉瓦造建築に光が当てられ始めた今日，建築学の視点から当マルカタ王宮都市を観察し，考察を加えることには重要な意義があると思われる。

本研究では，1985年から1988年にかけて行われた早稲田大学古代エジプト建築調査隊による発掘調査で得られた資料をもとにして，従来は具体的には提示されることの少なかった当王宮「列柱大ホール」(以下，「ホール」と略）の天井画片の分析作業を通し，特にこの「ホール」に描かれていたネクベト像[5]の当初形態を探究し，あわせて「ホール」の天井画の状態を復原的に考察する[6]。

また「ホール」のネクベトについて記述がなされる際[7]にはいずれの場合でも，実際の発掘に基づき，出土物に関して比較的詳しく記したタイトゥスによる仮報告書[8]が第一次資料として扱われているため，本稿ではこの仮報告書について検証も行いながら復原考察を進めたい。

1. 彩画片の出土状況

王の宮殿において最大の部屋である当「ホール」(壁面内法で長さ約28.4 m，幅約11.8 m[9]）は王の宮殿のほぼ中央を占め，室内には片側に8本の柱を備えた列柱が2列，合計16本の柱が並んでいたことが礎石の跡から知られる。「ホール」の長手方向各側面にはハーレムを構成する一続きの部屋部屋が4ヶ分づつ，あわせて計8ヶ分備えられ，また「ホール」の奥の戸口は玉座のある小部屋や王の寝室に通じているなど，当「ホール」が王の宮殿においてきわめて重要な役割を果していたらしいことがうかがわれる（図—2)。

「ホール」を取り囲む四面の壁体は現在，高さが約50 cmほど残存するに過ぎない。これは後代の王が新たに建造物を造る際，当王宮の日乾煉瓦を再利用することを目的として収奪したため[10]や，現地の農民がナイル川の肥沃土から作られたこの煉瓦を持ち去ったため[11]と考えられる。タイトゥスの仮報告書[12]やメトロポリタン美術館による発掘の短報[13]では白蟻による甚大な被害についても触れられており，早稲田大学による調査では他に地蜂によると思われる壁体の損傷が見受けられた。経年に伴い建築の倒壊や消失が進行する一方で，これら蝕害による被災や人工的な破壊も加わり，壁体は少しづつ失われていったと推定される。

彩画片はこうした壁面近くの床面上から多数出土した（写真—1～4，表—1)。大きさは最大で約65 cm×35 cmに及ぶものも見られたが，多くはこの半分以下の大きさである。総じて色彩を良好に保っているが，なかには褪色や表層の剝落が顕著であるものも見られた。

写真—1　「列柱大ホール出土，ネクベト画片
(写真中のスケールは10 cm)

写真—2　「列柱大ホール」出土彩画片
(写真—1彩画片の裏面，写真中のスケールは10 cm)

写真—3　「列柱大ホール」出土，ネクベト画片
(写真中のスケールは10 cm)

写真—4　「列柱大ホール」出土，聖刻文字片
(写真中のスケールは10 cm)

礎石の痕跡と思われる近辺からは彩画片は出土しなかった。かつては柱が立ち並んでいたはずの「ホール」の中央部から彩画片が出土しなかったことは，先行調査隊が出土物を壁際に移動して再び埋め戻した結果と考えられ，事実，西側壁面近くからは彩画片と共に1910年，あるいは1911年の日付をもつ英文の新聞紙の断片，またメトロポリタン美術館調査隊の指揮者であったウィンロックの名を記した包装紙片が出土した。これらはウィンロックの率いる調査隊が1910年から1912年にかけて当王宮を発掘したという，美術館紀要に掲載された短報[14]と合致する。壁面近くに寄せられた彩画片を守るように日乾煉瓦でその周囲を囲い込んだ場所も見られ，このような状況からメトロポリタン美術館の調査隊は，保護のために彩画片などの出土物を壁際に寄せ，また日乾煉瓦でその周囲を囲った後，場合によっては上から新聞紙や包装紙で覆って，再び土をかぶせたと考えることができる。

写真—5　「列柱大ホール」出土，天井下地材
(写真中のスケールは5 cm)

N(E), N(W), E(S), E(N), S(W), W(N), W(S)地点は上述した泥煉瓦による囲いこみが見られた場所であって，その内側には多量の彩画片が積み入れられていた。特にS(W)地点からは大きな彩画片が折り重なるようにして出土している。ここからはまた，植物を束ねて作られたマット状の下地材（以下「マット」と略）も同時に見つかった（写真—5)。一定以上の厚みを有する彩画片の裏側にはいずれも特徴的な圧痕が残されており（写真—2)，これは泥モルタルによる仕上げ塗りを支持するための下地材の痕と思われる。出土したマットは寸法・形状ともに多くの彩画片の裏側に残るこの圧痕とよく符合し，タイトゥスが仮報告書中で触れている天井支持材についての記述[15]とも一致するため，出土したマットは天井下地材であって，上述した圧痕を有する彩画片はかつては天井の一部を構成していたと考えられる[16]。彩画片の裏面には他に日乾煉瓦の圧痕を残すものも見られるので，こうした特徴を手がかりとし，天井を構成していた彩画片と壁面を構成していた彩画片との明確な峻別が可能であった。

S(E)とW(M)地点からはほとんど彩画片が出土しなかった。またE(M)地点からは何も出土しなかった。

表—1　「列柱大ホール」出土物一覧表

			東壁			南壁		西壁			北壁		計
			E(S)	E(M)	E(N)	S(E)	S(W)	W(S)	W(M)	W(N)	N(E)	N(W)	
絵画的主題	ネクベト		3	0	8	9	184	8	0	6	23	22	263
	人物		0	0	5	1	0	0	0	0	1	0	7
	鳥		0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	4
聖刻文字			0	0	4	0	57	10	0	12	11	3	97
幾何学的文様	スクロール		122	0	128	0	14	33	0	34	89	49	469
	スパイラル		1	0	1	0	0	0	0	0	0	4	6
	黄色塗文		2	0	37	0	1	2	0	5	34	6	87
	色帯	Aタイプ	12	0	39	0	52	25	0	2	34	15	179
		Bタイプ	0	0	3	3	3	7	1	2	8	6	33
		Cタイプ	0	0	17	0	3	7	1	2	17	6	53
建築役物片	コーニス		0	0	2	0	2	0	0	0	1	0	5
	トーラス		0	0	4	0	1	0	0	0	3	0	8
	コーナー		4	0	9	0	2	18	0	2	11	10	56
その他彩画片			38	0	53	4	109	20	26	24	138	39	451
木片			3	0	9	6	10	0	0	0	15	0	43
石片			0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	2
計			185	0	320	23	438	130	28	91	386	162	1763

2. 彩画片の類別

出土した彩画泥片のモチーフは大別すれば，(1) 絵画的な主題，(2) 聖刻文字，(3) 幾何学的文様，(4) 建築役物片，(5) その他，の5種に分けられる。これ以外に木製の断片[17]や石材破片[18]

W
Pamph
NISHIMOTO, S.
RECONSTRUCTION
1990

なども発見されたが，彩画片に比べて出土数は少ない[19]（表—1）。

描かれた主題によって5種に大別される彩画片は，前述したように裏側の圧痕の有無によってさらに壁画片と天井画片とに分けられる。ただし出土した彩画片の裏面にはほとんどの場合，天井下地材の圧痕が認められたので，彩画片全体の量から比較すれば，壁画片よりも天井画片の方が多く遺存していることが了解される。

（1） 絵画的主題を有する彩画片のうち，人物画片（7片）については，この画像が天体図などの場合を除けば壁面に描かれるのが通例であることや，タイトゥスの仮報告書[20]，メトロポリタン美術館蔵の模写[21]によっても「ホール」の壁面に人物像があったことが明らかにされているため，これらは壁画片と考えられる。小鳥を描いたものについては出土数が極めて少ないこと（4片），ハーレム部から発見された天井画の鳥（メトロポリタン美術館及びカイロ博物館所蔵）と酷似する点などから，もともと「ホール」に描かれていたものではなく，近隣の部屋から混入したものであると見てよいであろう[22]。

絵画的主題をもつ彩画片から，壁画片と思われるものや，「ホール」に属するとは考えにくい断片が取り退けられた後もなお主題が伺えなかった一群の画片に関しては，当王宮と同じ新王国期に建造されたラムセスⅡ世葬祭殿（ラムセウム）やメディネット・ハブのラムセスⅢ世葬祭殿，また王墓などの遺跡の装飾画と比較が行われた結果，ネクベト像と多くの点において描法が一致することが確認された。細部においてはいくつかの相違が認められながらも特徴的な描法は踏襲されており，特に上から赤—青—赤と塗り分けられる胴体や，胴部に近い方から大きく青，赤，黒と3つに塗り分けられる翼部，聖刻文字“šnw”（Q）を摑んでいる足などについては共通した表現方法が取られている点が注意を惹く。こうした観察結果より，主題が不明であった一群の画片は，ネクベト像を構成するものと判断される（写真—1，3，5）。多くのネクベト画像片の裏面には天井下地材の痕跡が残り，日乾煉瓦の痕を示したものは一点も見つからなかった。従ってこのネクベト像は天井に限定されて描かれていた可能性が高い。また天井下地痕はいずれの場合でもネクベト画像に対して水平方向に残存していた（写真—2）。

なお色層の剝落が顕著な数片においては，画層の下にネクベト像とは全く別のモチーフをうかがうことができた[23]。ネクベトや文字が描かれた断片で損傷がそれほどひどくない場合においても，画面の下層には上層のモチーフと異なる彩色が施されていた痕が部分的に見られ，ネクベト像と文字が描かれた彩画片に関しては少なくとも一度は描き直しがなされていることが明らかである。

ネクベトが描かれた彩画片は当「ホール」の他に「王の寝室」や，タイトゥスによって「B室」，「G室」と名づけられた部屋[24]などからも出土した。しかしながら「王の寝室」から見つかったネクベト像は「ホール」から出土したものに比べて小さく，また「ホール」のネクベト画片でうかがわれる前述したような描き直しの痕跡は全く見られない。一方，「B室」や「G室」の彩画片では，「ホール」の場合のようにネクベト像を描く前にいったん白の地色を塗ることをせず，泥モルタルに直接ネクベト像を描いていることから，「ホール」から出土した彩画片との判別は容易である。以上の点を踏まえて当「ホール」出土分の全彩画片を詳細に観察した結果，他室から混入したと思われるネクベト画片は見出すことができなかった。

（2） 聖刻文字片（写真—4）は裏面に天井下地材の圧痕を残すものが多く，この圧痕を有した聖刻文字の彩画片は全て横書きで書かれていた。彩画片の厚さが薄いために天井下地の痕が認められなかったもののうち，聖刻文字を縦に記した例が数片うかがわれたが，天井材痕を残すものと比べて文字の大きさはかなり小さく，描法も横書きのものと異なっているので，これら縦書きの聖刻文字に関しては天井に記されていたものとは考えにくい[25]。

（3） 幾何学的文様の大部分はスクロール文様で占められたが，スパイラル文様もごく数例見られた[26]。両者については共に天井に描かれていたことが裏面の圧痕より明らかである。スパイラル文様と判別される彩画片の数はスクロール文様の画片と比較すると非常に少なく，不自然に思われる。しかし，隣接するハーレム部の小部屋（N^5室[27]）などより，この文様が多量に出土している事実から，スパイラル文様に関しては隣室から混入したものと判断するのが妥当であろう。

色帯は数種出土したが，黄色地に近い側から白—青—白—赤—白の順に並ぶAタイプについては天井下地痕が認められた。同種の色帯が見られる彩画片にネクベトの黒い翼端もうかがわれる点から，この文様がネクベト像の近くに引かれていたことを知ることができる。

交互に並んだ赤と青のローゼットを伴う白—青—白の色帯Bタイプに関しては出土数が少なく，また天井下地の痕跡も確認されなかったが，当王宮の壁面装飾画に同種のものが見られるため，これらは壁面に描かれていたものであると考えられる。ブロックボーダーとも呼ばれる色帯Cタイプも出土したが，壁面に描かれていたと想定される人物画の断片にこのモチーフが枠取りとして用いられていること，壁面付柱のコーナー部の断片にもよくうかがわれることなどから，このCタイプも「ホール」の壁面の一部を構成していたと考えられる。

（4） 建築役物片はカヴェットコーニス，トーラス，コーナーの3種に類別され，カヴェットコーニスとトーラスに関しては壁面に付加されていたものである点が明らかである[28]。コーナーについてもそれらの泥片の様態などから，壁面の一部であることが強く示唆された。

（5） その他に分類される彩画片は大きさが3cm四方以下の小さなもので占められ，多くは赤，青，黄，緑などの単色が塗られているだけである。モチーフの確定は困難であり，裏面の痕跡はまったく認められないなど判断資料に乏しいため，今回の考察の対象からは除外した。

以上，出土彩画片について概略を述べたが，「ホール」の天井画を構成していたと明らかに判断されるモチーフは上記の考察結果から，ネクベト像・聖刻文字・スクロール文・色帯Aタイプの4種であることが結論される。

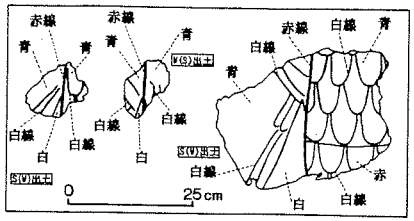
3.「列柱大ホール」天井画の復原考察

（1） ネクベト像の復原考察

ネクベト像は新王国期以降の神殿などの天井や楣の下面に両翼をまっすぐ広げて描かれる他，エル・カブのアメンヘテプⅢ世小神殿壁面[29]，ハトシェプスト女王葬祭殿の壁面[30]などで見られるように片翼を前に差し出し，もう片翼を下方に伸ばす姿でも描かれる。しかし後者の場合，下方に伸ばされた翼が通常は緑色に彩色されており，これに対して「ホール」から出土したネクベト画片の中からは緑色に塗られた翼が一片も見つからなかった。ラムセスⅢ世葬祭殿（メディネット・ハブ）の入口塔門壁面でうかがわれるような，両翼を広げながらも翼を半ば折った姿であらわされたネクベトもまれに見ることがきる[31]が，S(W) 地点からは両翼を横にまっすぐ広げた姿を示すネクベト像画片が複数出土しているため，「ホール」のネクベトも，新王国期の神殿列柱広間や王墓通廊の天井で典型的に見られるように翼をまっすぐ広げて並ぶ形姿をとっていたと判断される。

王墓などでは蛇の姿で現されるウァジェト像[32]と交互に並んだ例も見られるが，黄色地に黒線で描かれる蛇の頭部は出土せず，代わりにネクベトの下顎を示すものや嘴部分を描いた画片のみが発見されているので，当「ホール」ではネクベトだけが連続して描かれていたと考えられよう。胴体と青い翼部分の境を描いた同一部位が，S(W) 地点からは2つ，また W(S) 地点からは1つ出土しており，このことからこの部屋に少なくとも3羽以上はネクベト像が描かれていたことが確認される（図—3）。

ネクベト像についてはほとんど研究がなされていないために，この画像の復原を行うに際して参照すべき文献は限られる。私見では，ネクベト像の描法は新王国期以降のどの時代においても基本的に遵守される一方で，この画像の高さと幅の比例関係や首・翼部分などの細部の描かれ方，また時代が下るに従って特に胴部には細かい



図—3 ネクベト画像，同一部位画片

幾何学文様が施されるなど，年代と共に若干変化する傾向がうかがわれるように思われる。しかしネクベト画像のこのような変遷について述べた先行研究はなく，また第18王朝に属するネクベト像を図版で報告している例もきわめてまれであるため，当「ホール」から出土したネクベト像の復原考察では，若干時代が下るものの，同じ新王国期に属するセティⅠ世王墓やセティⅡ世王墓通廊天井に描かれたネクベト画像を参考とせざるを得なかった[33]。復原図の作成にあたっては，比較的大きい彩画片を用いる方が適当であると思われたため，S(W) 地点より出土したものを主に参照した（図—4）。

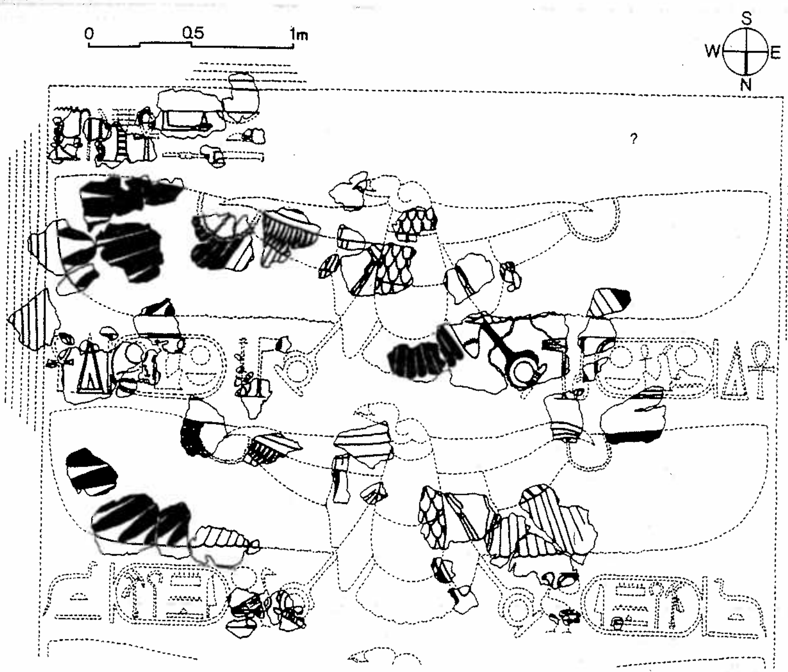
ネクベトの冠の断片と思われるものは発見されず，また冠を有していたとすれば尾翼の真下に位置しているはずであるが，該当する彩画片には黄色の地色以外に何も認められなかったため，当「ホール」のネクベトには冠がなかったと推定される。セティⅠ世王墓やセティⅡ世王墓に見られるような羽根飾りを両足に持っていなかったことは足部分を描いた断片から明らかであり[34]，“šnw”を摑んだ足の両脇には王名を含んだ聖刻文字が続いていたことが出土した画片より知られた。

組み立てられたネクベトの復原図からは，並んで描かれたネクベトの間隔は約1.1m，また全幅は約3.6mと推定された[35]。

（2） 聖刻文字の復原考察

聖刻文字に関しては，並んだネクベト像の間に描かれていたことが出土画片から分かり（図—4），上下エジプト王名[36]（図—5，B1～4）とサァ・ラー名[37]（図—5，C1～7）が複数出土した。アメンヘテプⅢ世のこれら2種類の王名のカルトゥーシュを並べて記す慣用的表現については，この王の建造による他の建築遺構などに残る碑文の集成が公刊されている[38]ために，その同定，及び復原を行うことができる。またこれら2種類のカルトゥーシュの前後に記される修飾語の復原に関しても，王名を修飾する慣用句として新王国期に広く用いられた言葉がいくつか知られているので，実際に出土した文字片によってかなりの程度，復原することができた[39]。

当「ホール」の場合，上下エジプト王名については，このカルトゥーシュの前に通常記される“nsw bit”



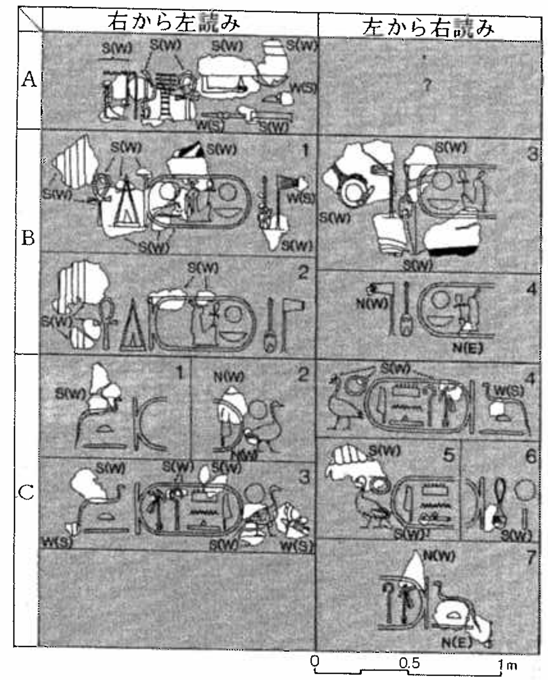
図—4 「列柱大ホール」中央柱間天井画復原図（見上げ図）

（，「二国の王」の意）の文字片と思われるものは一片も発見されなかった。上下エジプト王名をあらわすカルトゥーシュの前には，代わりに “nṯr nfr”（，「良き神」）の文字が描かれていたことが了解される[40]（図—5，B。特にB3）。一方，上下エジプト王名のカルトゥーシュの後には “di ᶜnḫ”（，「生命を与えられた者」）が描かれていたと考えられる[41]（図—5，B。特にB1）。カルトゥーシュの内部の，アメンヘテプⅢ世の王名をあらわす “Nb-m 3ᶜt-Rᶜ”（）の後には，修飾語 “stp-n-Rᶜ”（，「ラー神に選ばれし者」）が記されていたことを表す文字片も見つかったが，いくつも描かれていたはずの上下エジプト王名の別のカルトゥーシュ内部に，他の種類の装飾語が書かれていたかどうかは不明である[42]。

サァ・ラー名を記したカルトゥーシュ片は，ヘイスが述べるように全て白色顔料で消されていた[43]が，かろうじて残されていた色彩を詳しく観察した結果，カルトゥーシュ内には “ʾImn-ḥtp ḥḳ3 W3st”（）と記されていたことが知られた。カルトゥーシュの前には “s3 Rᶜ”（，「ラー神の息子」）が（図—5，C。特にC3），またカルトゥーシュの後には “ḏt”[44]（，「永遠に」），あるいは “mi Rᶜ”[45]（，「ラー神のように」，図—5のC6を参照）が描かれていたことが彩画片の分析より知られる。

一方S(W)地点からは上下エジプト王名やサァ・ラー名とは別に “n”（），“b”（），“nb”（），“pt”（），“di”（）などが，W(S) 地点からは “ᶜnḫ ḏdt w3s”（）の文字が出土し，同時にこれらの多くには上端または下端に補助線と思われる水平に引かれた白線が認められた（図—5 A）。上下エジプト王名やサァ・ラー名をあらわすいくつかの文字でも同様の補助線が見られたが，この場合は赤線で記されている。こうした補助線の色の違いの他，上記の文字は上下エジプト王名やサァ・ラー名を含む文字列の場合には記されることがないなど，特異な点が注目される[46]。

S(W) 地点より出土した “nb” の一部を示している断片には，同時に白—青—白と続くAタイプの色帯もうかがわれ[47]，しかもその裏面に残る天井下地痕は他のAタイプ色帯片と異なって，色帯に対し直交した方向を示していた。天井下地材に関してはこの部屋において同一の方向に並べられていたと考えるのが自然であり，翼を広げたネクベト像の両端に，Aタイプの色帯が垂直方向に描かれていたことを示す彩画片と共に，同じ色帯に



図—5 「列柱大ホール」中央柱間天井，聖刻文字復原図
（A：最上位ネクベト画像上部の文字列。B：ネクベト画像間の上下エジプト王名を含む文字列。C：ネクベト画像間のサァ・ラー名を含む文字列。）

対して直交した方向の裏痕を残すこのような画片が出土している点は，Aタイプの色帯がネクベト画像に対し，水平方向にも描かれていたことを示唆していると考えられる。当「ホール」のネクベト像が連続して描かれていたこと，また文字 “nb” の上下関係からこの文字の上にAタイプの色帯が引かれていたことは明らかであり，以上の点からこのAタイプの色帯は，並列したネクベト像のうち，最上位に位置していたネクベトの上に水平方向に描かれたものであり，またこのAタイプの色帯と最上位に位置するネクベトの間には，文字 “nb” を含む文字列が存在していたと推測される（図—4）。

ネクベトが並列する例では，最上位のネクベトの上に書かれる一行がネクベト間に記されるものと異なる場合が少なくない。その場合には一般に，ネクベトの称号が書かれるのが通例である[48]。S(W) 地点や W(S) 地点から発見された特異な文字片についても，上下エジプト王名やサァ・ラー名に属する他の文字片との相違や補助線の色の違いから，これらは最上位のネクベトの上に位置していた文字であったと想定される。S(W) 地点とW(S) 地点は隣接していることからも，このふたつの場所から出土した特異な文字片については接合が可能であって，本来は最上位に位置するネクベトの上に書かれていた文字列であったとみなされる。

W(S) 地点から出土した “ʾᶜnḫ ḏdt w3s”（「生命，安定，権力」）と記される文字の連なりの後には，“snb”「，「健康」）という組文字が存在したことが知られ，しかもその中の文字 “b” の後には，この文字列の最後尾を記すかのように白色で縦に補助線が引かれているのが見られた[49]。他の建築遺構においても，この組文字で終わる「生命，安定，権力，健康を与えん」という文が短い慣用句としてしばしば用いられていること[50]から，この文字列は “b” を最後として終わっていると考えられる。

一方，同時代の遺構に見られる同種の慣用句との比較からは，この前に「与える」という言葉があったはずであると類推され，また S(W) 地点からはこれに相当する文字 “di” が見つかっているので，この慣用句の主語と “di” の文字は，本来はつながっていたと推定される。両者が共に右から左読みである点や，上下エジプト王名やサァ・ラー名の文字片とは異なってふたつとも白い補助線を有している点，“di” が記される彩画片にはその文字の後に “ᶜnḫ”（「生命」）の文字の断片が見られる点などがこのことを傍証すると思われる。

ただしこの文字列はネクベト女神に対する称号であると想定されることから，「与える」という意味をもつ言葉はエル・カブのアメンヘテプⅢ世小神殿[51]などでも見られるように，正しくは接尾代名詞の三人称女性単数形（もしくは，“di·s”）で示されなければならない。

S(W) 地点から出土している “pt”（，「天空」）の文字片（写真—4，図—5 A）そのものについては，左から読むべきものか右から読むべきものなのかが判別できないが，この “pt” の左に隣接している茶色で描かれた文字片が仮に “s”（）であるとするならば[52]，この “pt” は “di” の右下方に位置していた文字であって，“pt” の左に接する文字 “s” は “di·s”（）の下の部分であったと想定することができる。この推論が正しければ文字 “pt” の上にはネクベト像に隣接してしばしば記される “nbt”（，「女主人」，転じて「女神」）が書かれていたと推察することができ，文字片 “di” の右には実際に “nb” の部分がうかがわれた。前述したように S(W) 地点からは “nb” の一部が出土しており，

この“nb”の断片は，“di”の右に記された文字片“nb”と接合できるように思われる。

現時点では，文字に関しては以上の点が明らかにされるに過ぎないが，今までの考察からは，最上位のネクベトの上に書かれていた文字のうち，右から左に記されたものについては，上下エジプト王名やサァ・ラー名が書かれた場合と同じようにネクベト像の，向かって左側の翼部の上にあったことが強く示唆され，またこの文章の後半部分は，…𓇋𓂋𓏏𓅱𓏏𓏏𓏏𓈖 (…nbt pt di·s ᶜnḫ ḏdt w3s snb)，「…天空の女神，彼女が生命・安定・権力・健康を与えんことを」であった可能性が高いと考えられる（図—4，また図—5A参照）。

4.「列柱大ホール」天井画の構成

建築遺構においてネクベト像は楣の下面にも描かれることをすでに述べたが，当「ホール」の出入口は幅が広い場合でも3mを越えることはなく，またネクベト像は連続して描かれていたことが知られるので，当「ホール」から出土したネクベト像は楣の下面ではなく，天井にあったものと考えるのが妥当である。天井にネクベト像が描かれる場合には通常，向きはその室内において同一であり，また部屋の長軸方向に沿って並んでいるので，当「ホール」でも同様の形態をとっていたと想定される。同時に，ネクベトの頭は石造神殿における列柱広間の例においては必ず部屋の奥に向かって配列されており[53]，当「ホール」においてもS(W)地点やW(S)地点から最上位に書かれていたと思われる文字列の断片が出土しているため，これらの点からも連続するネクベト像は，「ホール」の奥に頭部を向けて並んでいたと考えられる。

復原されたネクベト像の全幅は，この画像片の接合の結果や王名を含む文字列の復原などにより約3.6mであったと判断されたが，ネクベトの両脇に描かれていた色帯Aタイプの幅，及び木製であったと報告されている[54]柱頭の径などを勘案すれば，ほぼ当「ホール」の中央柱間（心々距離）の約4.2mに等しくなることが了解される。

タイトゥスは当「ホール」について「天井の装飾画はまたしても翼を広げたネクベトであるが，ここではもっと大胆に5m以上の翼長をもつ」[55]と述べている。しかしおそらく彼はネクベト像の翼長を過大に見たのであり，このような傾向は当「ホール」の大きさを「長さ30m以上」[56]，また室内の柱数を「18本」[57]と誤記している点からもうかがわれる。

この一方で，彼の仮報告書には当王宮の平面図が掲載されている[58]が，明示されている縮尺をもとに平面図中の「列柱大ホール」における中央柱間（心々距離）と長辺方向の長さ（壁内法）を割り出せばそれぞれ約4.5mと28.5mとなり，この値は早稲田大学調査隊による各々の実測値，約4.2mと28.4mにきわめて近い。以上のようにタイトゥスの仮報告書では平面図から知られる数値と記述されている数値との間に明らかな矛盾が見られるが，双方の数値を検討した結果からは，平面図から得られる値の方が正しいと判断される。

スミスはタイトゥスの報告に基づいて，この部屋のアーキトレーヴは天井面に露出していたはずであり，かつその方向は長軸方向であったはずだと述べている[59]。タイトゥスが「ホール」から発掘した木製の柱頭に関しては現在その所在が不明であり，また彼がアーキトレーヴについて仮報告書の文中では触れていないために，この部屋のアーキトレーヴについてはくわしいことが分からないが，少なくとも新王国期の神殿の列柱広間で見る限り，アーキトレーヴはいずれの場合でも天井面に露出して部屋の長軸方向に架け渡されており，アーキトレーヴのこうした架構法は遺構例から想定される限りにおいては，列柱広間の天井で長軸方向の軸線を強調する役割を果たしていたと考えられる。当「ホール」においても部屋の長手方向に連続するネクベト画像が復原されることなどから，アーキトレーヴは部屋の長軸方向に架け渡されていたと推定するのが自然であり，この時連続するネクベト画像には王権を誇示する目的の他に長軸方向の軸線の強調というアーキトレーヴと同じような効果も期待されていたと思われる。

当「ホール」におけるネクベト像は，それゆえこの部屋の中央柱間，すなわち部屋の長軸方向に架け渡されていたと想像されるアーキトレーヴの間に，全て頭を南側（「ホール」の内奥部）に向け，連続して描かれていたと想定するのが妥当であり，実際の出土彩画片を詳細に分析して復原考察を行った結果，タイトゥスの仮報告書に基づくスミスの考察[60]や，タイトゥスとスミスの記述をもとにして描かれたバダウィの復原案[61]に大きな誤りはないと結論される。しかしバダウィによる復原案の細部に関しては，他の建築遺構を参照したために生じたと思われる当「ホール」の実際のネクベト画片との相違が若干うかがわれ，出土彩画片をもとにした復原図からはネクベト像の頭部の向きや羽根飾りの有無，また聖刻文字についてなど，いくつかの訂正すべき箇所を指摘することができよう。なお，当「ホール」の東西に位置する両脇間の天井画については，バダウィの復原案[62]に見られるようなスパイラル文様ではなく，彩画片の出土点数からはスクロール文様であったと想定される。

結　語

「ホール」より出土した多くの彩画片に見られるモチーフや裏面にうかがわれる状態から，まず壁画の断片と天井画片とが類別され，さらに後者については画片の分布状態，形状の特徴，隣室から混入した可能性の有無などに着目して詳しく分析し，同時に建築遺構例との比較研究を行って考察を重ねた結果，この「ホール」の天井中央柱間には連続して描かれたネクベト像が南側に頭部を向けて存在していたことが明らかとなった。またネクベト間に記されていた文字や最上位に書かれていた文字についても同様に推定復原がなされ，「ホール」中央柱間の天井画の，実際に出土した彩画片に基づく復原図が初めて作成されるなど，得られた成果は少なくない。

建築遺構の天井に連続して描かれるネクベト像の例は新王国期以降によく見受けられるが，第18王朝に属するものとしては当王宮の例以外には皆無であり，マルカタ王宮に描かれたものが初出である。ネクベトと共に記される文字が通常，資料的に重要な内容を持たないため，この画像については従来，深く研究がなされなかったといってよいが，建築学的視点からは連続するネクベト像のモチーフは室内の軸線を強調する役割を果たしているものと見ることができ，しかもこの画像が石造神殿遺構における列柱広間の例においても必ず部屋の内奥部に向けて描かれるという事実は，空間的な序列性が意識されていたことを物語っていると考えられよう。

なお本研究は，文部省科学研究費海外学術研究（昭和60～62年度交付，研究代表者・渡辺保忠，課題：エジプト・マルカタ南・魚の丘建築の復原調査研究，マルカタ王宮址との建築学的・美術考古学的比較研究）の交付を受けた調査の成果に基づいて行われた点を付記する。

注・参考文献

1) Edwards, I. E. S. et al. eds. : The Cambridge Ancient History, Vol. II, Part 1, p. 819, Cambridge, 1973

2) マルカタ王宮は1888年にダレッシィによって初めて発掘がなされ，短い報告が行われている（Daressy, M. J. : Le Palais d'Aménophis III et le Birket Habou, Annales du Service des Antiquités de l'Égypte, T. 4, pp. 165～170, 1903）。その後，タイトゥスが部分的な発掘調査を行い，仮報告書を出版した（Tytus, R. de P. : A Preliminary Report on the Re-excavation of the Palace of Amenhotep III, N. Y., 1903）。次いでメトロポリタン美術館の調査隊による発掘が行われ，美術館の紀要にその概報が載せられた（Winlock, H. E. : The Work of the Egyptian Expedition, Bulletin of the Metropolitan Museum of Art（以下BMMAと略），Vol. 7, No. 10, pp. 184～190, 1912 ; Evelyn-White, H. G. : The Egyptian Expedition 1914～15, BMMA, Vol. 10, No. 12, pp. 253～256, 1915 ; Lythgoe, A. M. and Lansing, A. : The Egyptian Expedition 1916～17, BMMA, Special Supplement, pp. 3～14, 1918）が，正式な報告書は刊行されていない。1971年から1974年にかけてはペンシルヴァニア大学博物館の発掘隊によって主に「ビルケット・ハブ」と呼ばれる湖の調査が行われた。しかし全8巻からなる報告書のうち2冊が出版されたのみ（Leahy, M. A. : The Inscriptions (Malkata IV), Warminster, 1978 ; Hope, C. : Jar Sealings and Amphorae (Malkata V), Warminster, 1978）で，残りの6巻の刊行は中断されている。

3) 注2）に挙げたダレッシィの論文では，出土した土器片から当王宮の建立年代がアメンヘテプIII世の時期にまで遡る点が示されている（Daressy, op. cit., pp. 168～9）。マルカタ王宮から出土した土器片に関して最も包括的な考察を行ったのはヘイス（Hayes, W. C. : Inscriptions from the Palace of Amenhotep III, Journal of Near Eastern Studies, Vol. 10, pp. 35～40, 82～104, 156～183, 231～242, 1951）であるが，ペンシルヴァニア大学付属博物館による調査報告書でも出土土器片の報告が行われている（Leahy あるいは Hope, op. cit.）。

4) Hayes, op. cit., pp. 35～37

5) 上エジプト王権の守護女神。禿鷹の姿で現された。下エジプト王権の守護神ウアジェト（注32）と対をなす。

6) 当「ホール」天井画ネクベト画像の復原研究は，渡辺保忠・ほか2名，「マルカタ王宮出土彩画ネクベト画像の復原について，マルカタ王宮に関する研究11（以下「研究」と略）」，日本建築学会大会学術講演梗概集（以下「大会」と略），pp. 905～906, 1986. 8 ; 同，「研究18」; pp. 1037～1038, 1987. 10においても行われている。

7) 例えば Riefstahl, E. : Thebes ; In the Time of Amunhotep III, p. 68, Okulahoma, 1964 ; Badawy, A. : A History of Egyptian Architecture ; The Empire, pp. 49～50, 特に Color Plate III ; また Smith, W. S. : The Art and Architecture of Ancient Egypt, p. 295, Harmondsworth, 1981 など。

8) Tytus, op. cit.

9) 渡辺保忠・関　和明，「"King's Palace" 列柱大ホールの設計寸法について，研究16」，大会，pp. 1033～1034, 1987. 10。

10) ラムセスIII世葬祭殿（メディネット・ハブ）に付属する王宮址の日乾煉瓦からは，アメンヘテプIII世の王宮名が押印されたものが発見されており，当王宮の日乾煉瓦が再利用されたことが明らかである。Hölscher, Uvo : The Architectural Survey of the Great Temple and Palace of Medinet Habu, Oriental Institute Communications, No. 5 ; Medinet Habu 1924～28, p. 39, Chicago, 1929

11) 「マルカタ」という地名は「(古代の) ものが拾える場所」といった意味を持ち（Tytus, op. cit., p. 9 ; Riefstahl, op. cit., p. 66 ; Helck, W. et al., : Lexikon der Ägyptologie, Band III, col. 1174, Wiesbaden, 1975），多くの遺物が持ち去られたことは想像に難くない。また遺跡の日乾煉瓦は現地農民によって "sebakh" と呼ばれ（Hölscher, op. cit., p. 39 ; Kemp, B. J. : The Harim-Palace at Medinet el-Ghurab, Zeitschurift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde, 105, p. 126 ; Spencer, A. J. : Brick Architecture in Ancient Egypt, p. 1, Warminster, 1979 など），田畑の土質を肥沃化するために利用された。

12) Tytus, op. cit., p. 13

13) Winlock, op. cit., p. 186

14) Winlock, ibid., p. 184

15) Tytus, op. cit., p. 13

16) 同じような天井支持材の痕跡を残した泥片が，アマルナ

でも発見されている。Bomann, A.：Report on the 1984 Excavations；Chapel 561/450（The Main Chapel），Amarna Reports Ⅱ, pp. 1～17, London, 1985；特に Figure 1.9., 1.10 を参照。マットについては Wendrich, W.：Preliminary Report on the Amarna Basketry and Cordage, Amarna Reports, V, pp. 169～201, London, 1989；特に，Figure 9.18 の type 2 が「列柱大ホール」S（W）地点より出土した天井下地材と酷似する。その他，Peet, T.H. and Woolley, C.L.：The City of Akhenaten, Part Ⅰ, pp. 57～58, Oxford, 1923 などにおいても，マットの出土が報告されている。スミスはマルカタ王宮とアマルナ王宮の天井支持方法を，各々図示して比較を行っている（Smith, op. cit., pp. 294～295, 特に図 290 を参照）。

17） 渡辺保忠・中川　武，「マルカタ王宮出土木片について，研究 13」，大会，pp. 1027～1028, 1987.10

18） 渡辺保忠・堀内清治，「マルカタ王宮建築における礎石と柱，研究 6」，大会，pp. 895～896, 1986.8

19） 彩画片の出土点数に関してはその後，小片についても分析が行われ，また彩画片の接合作業も進んだために，渡辺保忠・吉村作治，「マルカタ王宮出土彩画の装飾モチーフについて，研究 8」，大会，p. 900, 1986.8, 及び，「マルカタ王宮出土彩画の装飾モチーフについて（その 2），研究 8」，大会，p. 1036, 1987.10, に掲載されている各々の表の数値と異なっている。表―1 は 1990 年 1 月 31 日現在における分析結果に基づいて作成されている。

20） Tytus, op. cit., p. 21

21） Wilkinson, C.K. and M. Hill：Egyptian Wall Paintings；The Metropolitan Museum of Art's Collection of Facsimiles, p. 122, "48.105.7", N.Y., 1983

22） メトロポリタン美術館，及びカイロ博物館に所蔵されているこれらの画片は「ホール」に隣接したハーレム部の部屋から出土したものである。Winlock, op. cit., p. 185～186

23） 渡辺保忠・ほか 2 名，「マルカタ王宮出土彩画ネクベト画像の復原について，研究 11」，大会，p. 905, 1986.8, 図―1 F

24） Tytus, op. cit., p. 11, "plan of excavated portion"

25） これらの文字片は神殿や墓の壁面によく見られるように行を区切る縦線の間に記され，文字片の意味も「その（定冠詞）」，「墓」など，天井材の痕を残すものとは明らかに異質であり，壁面に描かれていた可能性が高い。

26） 渡辺保忠・ほか 3 名，「マルカタ王宮出土彩画，ROSETTE 文，SPIRAL 文，SCROLL 文の復原について，研究 9」，大会，pp. 901～902, 1986.8

27） 「N^{5} 室」は 1987 年度の調査で発掘がなされた。この部屋名は Porter, B. & Moss, R.L.B.；Topographical Bibliography of Ancient Egyptian Hieroglyphic, Texts, Reliefs, and Paintings；Vol. 1, Part 2, London, 1964, plan XVIII を踏襲し，仮につけられたものである。

28） 渡辺保忠・ほか 3 名，「マルカタ王宮出土コーニス・トーラス部の復原について，研究 19」，大会，pp. 1039～40, 1987.10

29） Tylor, J.J.：Wall Drawings and Monuments of El Kab；The Temple of Amenhotep Ⅲ, pl. 7, London, 1898

30） Wilkinson et al., op. cit., p. 6

31） Oriental Institute of Chicago University：Medinet Habu, Vol. VIII, pl. 617, Chicago, 1940

32） 下エジプト王権の守護女神で，コブラの姿によって現される。上エジプト王権の守護神ネクベトと対をなす。

33） アマルナの職人たちの集合住宅址の近傍聖所からもネクベト画像片は出土し，復原研究が行われている（Garfi, B.：Report on the Excavations, Amarna Reports Ⅱ, pp. 18～28, London, 1985）が，この画像についての公刊資料に乏しいため，図版として報告されている数少ない例である，第 20 王朝のラムセスⅥ世王墓のネクベト画像（Piankoff, A.：The Tomb of Ramsses Ⅵ, N.Y., pls. 145, 160, 172, 177, 1954）が参照されている。早稲田大学による調査ではセティⅠ世とセティⅡ世両王墓の撮影が許可されたため，より年代の近いこれら王墓通廊天井のネクベト画像を復原の参考とすることができた。

34） 渡辺保忠・ほか 2 名，「研究 11」，op. cit. の復原図―4 を作成する際，ネクベト像の足部分に関しては当「ホール」より出土した足の部分を示す断片が損傷していたため，ネクベト像の描法が新王国期以降，基本的には遵守されているという点を踏まえ，渡辺保忠・ほか 2 名，「研究 18」，op. cit. で述べたように，この部分の復原に限って「南宮」（「研究 18」では「女王宮」，1985 年度調査時に「ホール」との比較のため部分的に発掘）から出土したものを参照した。しかしながらその後の「ホール」の発掘調査の続行により，ネクベト像の足部分を示す彩画片が当「ホール」から他にもいくつか発見され，当「ホール」のネクベト像は羽根飾りを持たず，「南宮」のネクベト像は羽根飾りを有するという相違点が明らかとなった。

35） 渡辺保忠・ほか 2 名，「研究 11」，op. cit. においてネクベトに関する最初の復原が行われたが，資料として用いたメディネット・ハブ神殿内のトトメスⅢ世小神殿で見られるネクベト像は，その後の比較研究の結果，プトレマイオス朝のものと比例関係が酷似する点が明らかとなったため，本稿では第 19 王朝に属することが確かであるネクベト画像を用い，再び復原考察をおこなった。このため，復原されたネクベト像の大きさは前述の考察結果とは異なっている。

36） ほとんどの古代エジプトの王は 5 種の名を有したが，このうち上下エジプト王名とサァ・ラー名（注 37 参照）は楕円状の枠（カルトゥーシュ）内に記される。上下エジプト王名はネスゥ・ビト名とも呼ばれ，多くの場合，ラー神の名と結びつけられた。アメンヘテプⅢ世の上下エジプト王名「ネブ・マアト・ラー」（，Nb-m 3ˁt-Rˁ"）は，「ラーの正義の主」というほどの意味をもつ。

37） 太陽神の息子名，あるいは誕生名とも呼ばれる。今日に言う「姓」に近い。アメンヘテプⅢ世のサァ・ラー名，「アメン・ヘテプ」（，'Imn-ḥtp）には「アメン神に適う者」，またその修飾語「ヘカ・ワセト」（，ḥk3 W3st）には「テーベの統治者」というほどの意味がある。

38） Lepsius, C.R.：Denkmäler aus Ägypten und Äthiopien, 18 Bände, Leipzig, 1849～1913, 特に Abt. Ⅲ, Bl. 72～73；Sethe, K.：Urkunden des Ägyptischen Altertums, Abt. Ⅳ, Urkunden der 18. Dynastie, Leipzig, 1906～1909 など.

39） Sethe, op. cit., passim

40），41） 両者とも，上下エジプト王名の修飾語としてしばしば用いられることが知られている。Sethe, op. cit. 参照。なお，"di ˁnḫ" は当「ホール」からは右から左読みのものしか出土していないが，上下エジプト王名の後ろに記されていたと考えられる他の文字が見つかっていないため，本稿では他の建築遺構で見られる文字列の例から類推して，左から右に読む上下エジプト王名の文字列も，右から左読みのものと同じであったと判断した。

42） アメンヘテプⅢ世の上下エジプト王名を示すカルトゥーシュ内に見られる修飾語としては他に tit-Rˁ（，「ラー神の現身」），iw3t-Rˁ（，「ラー神の継承者」）などが代表的なものとして知られている。Lepsius, op. cit. などを参照。本稿の図―4 では新王国期の王墓通廊でよく見られるように，上下エジプト王名同士，サァ・ラー名同士を向かいあわせ，カルトゥーシュ内の修飾語も左右で同じものを復原した。

43） 次代の王アケナテンが消したと考えられている。Hayes, op. cit., p. 236；また Tytus, op. cit., p. 10 を参照。

44） サァ・ラー名の後に "ḏt" が置かれることを直接示す画片は発見されていないが，サァ・ラー名を修飾する慣用的表現としてよく見られること（注 39, また Beinlich, H. et al.：Corpus der Hieroglyphischen Inschriften aus dem Grab des Tutanchamun, passim, Oxford, 1989），"ḏt" の文字片の前部に白い汚れが見られることなどから，この文字は白色顔料で消された（注 43）参照）サァ・ラー名の後に続いていたものであると判断される。

45） "mi Rˁ" に隣接したカルトゥーシュ片からこの文字の読む向きが知られる。その結果，"mi Rˁ" は左から右に記される場合，通例は と書かれるが，ここでは順番が逆転して と描かれていた点が明らかとなった。同様の例として同じ第 18 王朝，ツタンカーメンの墓からの出土品に見られる文字などを参照（Beinlich et al., op. cit., passim）。この文字片については "ḏt" と同様に白い汚れが見られる（注 44）点から，サァ・ラー名の後ろに続くと推定される。当「ホール」から複数出土した "ḏt" と比較して，"mi Rˁ" の断片が一片しか出土していない点は不自然であるが，近隣の部屋から混入した文字片とは考えにくいため，本稿ではこの文字片が少なくともサァ・ラー名の後ろに続いていたと推定されることだけを指摘するにとどめ，図―5 ではＣの中に分類を行った。

46） "n" と "nb" は上下エジプト王名やサァ・ラー名のカルトゥーシュ内にも見られるが，当「ホール」から出土したカルトゥーシュ内は白い地色で塗られており，これに対して上記の文字片は黄色地の上に描かれていた。このため，S(W) から出土したこれら "n" と "nb" の文字片については，上下エジプト王名やサァ・ラー名を記すカルトゥーシュを構成していたものとは異なると考えられる。

47） 白―青―白と続く色帯だけが見られる断片であるが，色帯の幅や裏面に残る痕跡の状態などから，Ｂタイプではなく，Ａタイプの色帯の断片であると判断される。

48） 例えばラムセスⅢ世葬祭殿（メディネット・ハブ）第 1 塔門天井，同第 2 塔門天井，同東列柱廊天井，同西列柱廊天井，カルナック・コンス神殿列柱広間天井，セティⅠ世葬祭殿（テーベ）列柱広間天井など。

49） 文字列の上下を揃えるために引かれた白線の補助線とは別に，文字自体の下書き線も見られたが，これらは例外なく赤色で描かれており，白色の縦線は文字列の最後尾を記したものと思われる。カルトゥーシュの前縁部に垂直に引かれた補助線の例については渡辺保忠・ほか 2 名，「研究 18」，op. cit., 図―3 を参照。

50） Gardiner, A.：Egyptian Grammar, pp. 50～51, Oxford, 1957

51） Tylor, op. cit., pl. 7

52） 古代エジプトにおいて，聖刻文字はほぼ決まった色彩で塗られ，この文字は茶の単色で描かれる。

53） セティⅠ世葬祭殿（テーベ），同葬祭殿（アビドス），ラムセスⅡ世葬祭殿（ラムセウム，テーベ），ラムセスⅡ世による大神殿（アブ・シンベル），ラムセスⅢ世葬祭殿（メディネット・ハブ），カルナック・コンス神殿（テーベ）など，新王国期における多数の神殿の列柱広間でこうした傾向が見られ，デンデラのハトホル神殿，エスナのクヌム神殿，エドフのホルス神殿，コム・オンボの神殿など後期の例でも同様の傾向を示している。

54） Tytus, op. cit., p. 20, 及び Fig. 12

55），56），57） Tytus, ibid., p. 20

58） Tytus, ibid., p. 11, "Plan of excavated portion"

59），60） Smith, op. cit., p. 295

61），62） Badawy, op. cit., Color Plate Ⅲ

（1990 年 4 月 10 日原稿受理，1990 年 8 月 6 日採用決定）

Supplier: **BRZ - Brooklyn Museum Library**
General Record Information
Request Identifier:33168177 Status: SHIPPED
Request Date: 20070822 Source: ILLiad
OCLC Number: 43119918
Borrower: CGU Need Before: 20070921
Receive Date: Renewal Request:
Due Date: 20070922 New Due Date:
Lenders: *BRZ, BRZ, BRZ
Request Type: Copy

Bibliographic Information
Find this in your library Connect to The Brooklyn Museum's Library Catalog
Call Number:
Author: Nishimoto, Shin-ichi.
Title: Reconstruction of the figure Nekhbet on the ceiling of the great columned hall at the Malkata palace : Studies on the Malkata palace I /
Imprint: [S.l. : s.n.], 1990.
Article: , Reconstruction of the Figure Nekhbet on the Ceiling of the Great Columned Hall at the Malkata Palace: Studies on the Malkata Palace I
Volume: 416
Date: 1990
Pages: 111-121
Verified: <TN:781093><ODYSSEY:216.54.119.59/ILL>
OCLC

Borrowing Information
Patron: Emery, Virginia L
Ship To: Interlibrary Loan Service/Univ.of Chicago Library/1100 East 57th St. JRL 121/Chicago, Illinois 60637/Ariel 128.135.96.233
Bill To: Same *****CIC REQUEST***** +++++RLG SHARES+++++
Ship Via:ILDS/LIB RATE/ARIEL/ODYSSEY
Electronic Delivery: Odyssey - 216.54.119.59/ILL
Maximum Cost: IFM - $30
Copyright Compliance: CCL
Fax: 773-834-2598
Email: interlibrary-loan@lib.uchicago.edu
Affiliation: CIC, Illinet, SHARES
Borrowing Notes: SHARES

Lending Information
Lending Charges: IFM - 10
Shipped: 20070823
Ship Insurance:
Lending Notes: Sent snail mail.
Lending Restrictions:
Return To: copy
Return Via: Library Rate